

「砂川問題」の同時代史 —歴史教育家、高橋礪一の経験を中心に— Issue of Historiography of the “Sunagawa Struggle”: From Shinichi Takahashi’s experiences of “Sunagawa Problems”

高原 太一

TAKAHARA TAICHI

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

著者抄録

本稿が考察対象とするのは、「洋学論」で知られた歴史家であり、戦後の歴史教育運動を牽引した歴史教育家である高橋礪一（1913～1985）の「砂川闘争」をめぐる同時代的経験である。高橋は「砂川闘争」に、はじめは雑誌社の特派員として関わったが、その現場で拡張問題にとどまらない「砂川問題」の多層性に直面して以降、「基地問題文化人懇談会」のメンバーとして陽に陰に闘争支援に尽力した。本稿では、1955年9月13日の「出会い」から「流血の砂川」と呼ばれた警官隊との衝突を経て、測量の一時中止が発表された1956年10月15日までの約1年間を中心に考察する。その間に高橋が記した2本のルポルタージュや集会／座談会での発言録、「流血の砂川」直後に書かれた1本の評論を検討素材とした。当時を代表する知識人の一人であった高橋は、砂川闘争という政治運動にどのように関わったのか。そして歴史家として、同時代の出来事をいかに記述したのか。高橋によって生きられた「砂川闘争」の実相を同時代的な記録から掘り起こした。

Summary

The Sunagawa Struggle (1955-1976) was the farmers movement against the US military base in Tachikawa, the western part of Tokyo. Sunagawa was Japan’s mulberry town known for its high-quality sericulture farming, and for this reason the village was nicknamed ‘Mulberry Town’. Therefore, the leader of the movement was Ichigoro Aoki, a well-known sericulture farmer. However, dozens of supporters such as radical union men, students and the intellect of the age gathered there. In this article, I mainly focus on one of the intellect Shinichi Takahashi’s experiences of the Sunagawa Struggle in 1955 and 1956. Shinichi Takahashi (1913-1985) was a Japanese historian and an educator. He was a pioneer in developing and popularizing the education of history in the post-war era. He first visited Sunagawa on September 1955 as a special correspondent and faced many ‘Sunagawa-Problems’ in addition to the expanding US military base. Based on his reports, articles and critical essays, this paper traces the problems of the Sunagawa Struggle.

キーワード

砂川闘争 高橋礪一 支援者 知識人 同時代史

Keywords

The Sunagawa Struggle; Shinichi Takahashi; Supporters; Intellectuals; Historiography

原稿受理：2019.01.07

Quadrante, No.21 (2019), pp.189-209.

目次

はじめに

1. 砂川と出会う（1955年9月13日、骨格測量初日）
2. 砂川を語る（1955年9月25日、歴史教育者協議会第七回大会）
3. 砂川の教師と悩む（1955年10月31日、座談会「基地砂川教育」）

4. 「仲間」を集う（1955年11月から1956年10月まで）
5. 再び砂川へ（1956年10月1日から15日まで）
6. 砂川を記す（1956年11月、「流血の砂川」直後）
おわりに代えて——砂川を書き続ける（1956年から1975年まで）



はじめに

本稿で考察対象とするのは、「洋学論」で知られた歴史家であり、戦前から戦後にかけて中学校の教壇に立ち、退職後も長年歴史教育運動を牽引した歴史教育家である高橋磯一（1913～1985 年）の「砂川闘争」をめぐる同時代的な経験である。

敗戦から 10 年の 1955 年 5 月に、東京都北多摩郡砂川町（現立川市砂川町）で始まった米軍立川基地拡張計画に反対する抵抗運動「砂川闘争」に高橋は当初、雑誌『世界』特派員としてその「現場」取材し、ルポルタージュに纏めた。そこで「拡張問題」だけに留まらない「砂川問題」の複層性に直面した高橋は、以後 20 年間にわたって「問題」と付き合い続けることになる。

本稿では、1955 年 9 月 13 日の「出会い」から一般に「流血の砂川」として知られる負傷者 1,001 名の「衝突」を経て、政府による測量一時中止の発表が出された翌日（1956 年 10 月 15 日）の「砂川基地反対闘争勝利への国民総蹶起大会」までの約 1 年間を中心に、高橋が同時代的に記したルポルタージュ（本稿第 1 節、第 5 節）や集会（第 2 節）・座談会（第 3 節）での発言、そして「流血の砂川」直後に書かれた評論（第 4 節）を用い、高橋と「砂川問題」の関わりを分析していく。

当時を代表する知識人の一人であった高橋は、砂川闘争という政治的運動にどのように関わったのだろうか。そして歴史家として、同時代の出来事をいかに記述したのか。また、歴史教育家として「砂川の問題」にどう対峙し、問題解決のために行動したのか。既存の砂川闘争史において検討されることがほとんどなかったその姿を、本稿では同時代的な自身による記述という限られた史料からであるが考察していきたい。いわば、砂川闘争が当時の「知識人」にとっていかなる経験であったのか、高橋によって生きられた「砂川闘争」の実相に以下で迫りたいと考える。

その作業に移る前に、ごく簡潔にはあるが、先行研究について触れ、本稿の位置を示しておく。現在から約 60 年前の 1955 年に起きた「砂川闘争」については、これまで「当事者」による「記録」（宮岡 1970、豊泉 2014）や後述する「証言録」（星 2005）、また写真集（星 1996）など多くの史資料が残されてきた。例えば、星紀一によるインタビュー集『砂

川闘争 50 年 それぞれの思い』（2005）には、当時学生や労働者だった人々に加えて、地元の闘争主体であった「反対同盟」のメンバーやその家族・遺族にいたるまで幅広い人々の「回想」が収載されている。しかし、同出版が 2005 年という時間的制約もあり、作家や学者、芸術家など当時「文化人」と呼ばれた「支援者」たちの証言は収められていない。その「文化人」と砂川闘争の関わりについて考察したものとしては、府中市美術館学芸員である武居利史による「砂川闘争と美術家」（武居 2012）が代表的である。だが、その主眼は新海覚雄や箕田源二郎といった芸術家／アーティストの活動と作品に置かれているため、高橋などの歴史家や文筆家の活動については記述されていない。ただし、同論文には高橋も深く関わった文化人による闘争支援組織「基地問題文化人懇談会」についてその概略が記されている（武居 2012: 19）。高橋が闘争期間中、地元においてもっとも関わりを持ったのが、町に唯一の中学校、砂川中学校に勤める教師たちであった。彼／彼女たちは、「基地と教育研究サークル」を闘争開始後にみずから組織し、学校で起きている「砂川問題」を広く訴えるため「教育研究全国集会」や「教育研究東京大会」などで発表すると共に、同校の生徒が記した作文を纏めた文集の発行に尽力した。その文集「スナガワ」については、新井浩子による「1950 年代の生活記録・綴方に関する一考察——文集スナガワを中心に——」（新井 2001）がその先駆的な研究である。しかし、同論文の考察対象はもっぱら生徒が記した作文の内在的検討であるため、高橋を初めとする「文化人」が同サークルの教師たちといかなる関係性を結んでいたかについては立ち入って論じていない。同校の教師と闘争の関係性については、「立川・女の暮らし聞き書きの会」の会員である竹内信子による聞き書き「基地と教育 その 1 『砂川で私は、大きく変わりました』」（竹内 1987）が明らかにしている。高橋が「座談会」で対談をした地元教師たちの当時の事情が詳しく窺える史料であり、本稿第 3 節でも積極的に活用した。他にも近年、砂川闘争については「地域／地元」からの研究が進められている。その最たるものが、「砂川村役場文書研究会」による「旧砂川村（町）役場文書の構造と情報に関する学際的研究」（森脇 2015:

6) である。しかし、その地元と「共闘関係」にあった支援者については、労働組合との関わりを示した明田川融の論文「一九五五年の基地問題——基地問題の序論的考察——」（明田川 2000）や、砂川に「激励電報」（相川 2015: 40）を寄せた「共感者」（同前）について分析した相川陽一の「基地拡張反対運動をめぐる共感の構図—砂川闘争における『激励電報回覧綴』に基づいて—」（相川 2015）などの蓄積はあるものの、「文化人」の活動について論じたものは管見では見当たらない。そして、本稿の考察素材となる高橋が記したルポルタージュや発言録、あるいは評論についても、これまで検討素材として取り扱われることがなかった。しかし、これらの同時代的な「記録」からは、支援する「知識人」の側の内的緊張や葛藤の様子が窺い知れる貴重な史料である。砂川闘争を含む戦後の「民衆運動」については、これまで歴史学者によって多彩な研究がなされてきた。だが、そのとき記述／考察の対象とされるのは、大概、立ち上がる／らない「民衆」の動機や思想、精神史であり、それを「支援する側」であった「知識人」については、あまり検討されてこなかったと感じる。その意味で、高橋の「砂川問題」との同時代的な関係性を辿る本稿の作業は、砂川闘争の民衆史的研究の可能性を一步広げるものであると期待する。

最後に、本稿のタイトルについて一言する。本稿では、「砂川闘争」の同時代史ではなく、「砂川問題」の同時代史とした。それは「砂川闘争」という言葉が往々にして、強制測量阻止の闘い、つまりは警官隊との「衝突」を中心に記述されること（五味他 1998、佐々木他 2005、浜島書店編集部 2006）に抗うためである。果たして、砂川闘争の「現場」というのは「衝突現場」だけであり、「砂川問題」というのは（同時代としても）「拡張問題」だけであったのか。その「定説」を根本的に問い直したいというのが、本稿のもう一つの目的である。高橋の姿に密着する作業を通して砂川闘争の新しい「像」に迫りたいと考える。

1. 砂川と出会う（1955年9月13日、骨格測量初日）

高橋がはじめて砂川闘争の「現場」と「問題」に接したのは、1955年9月13日のことであった。

その日は奇しくも、警官隊との衝突の末、五日市街道上に初の測量の杭が打たれ、地元行動隊長の青木市五郎が、のちに闘争のスローガンとして知られる「土地に杭は打たれても、心に杭は打たれない」という悲痛な思いをこめた言葉を吐いた日であった。

高橋は、この日、雑誌『世界』の特派記者として、いわば仕事で測量阻止の現場を訪れていた。高橋は、この日のことを「砂川の町に着いたのは午前五時に近かった。まだあたりはうす暗く、寝不足のぼくの目は渋いが頭だけが妙にさえている。立川の宿屋では二時間とはねむれなかった」（高橋 1955: 184）と、「ルポルタージュ 九月十三日の砂川」の書き出しで明かしている。

その不眠の理由は、「夜中でも飛び立っていく大型機の爆音」（同前）と「店の前をツッ走る軍用トラックの地響き」（同前）、「耳もとの蚊の鳴声と蚤の襲来」（同前）によるものであったと述べているが、「立川の宿屋の大部分がパンパン宿になって、ほんのわずかのこった『まじめな』宿屋に、各社の報道陣、ニュース映画班等がひしめいてゴッタ返している」（同前）のが、そのときの状況であったから、蚊や蚤に悩まされるのも、間接的には「基地の町」である立川の固有な状況によるものであった。しかも、高橋は、米軍立川基地所属と思われる「大型機」の騒音や「軍用トラック」の振動に悩まされていた。つまり、高橋は、拡張問題に揺れる砂川の「現場」を訪れる前にすでに「砂川問題」の一端を体感していた。

つづく文章で、高橋は、「しかし、ねむれないのは、私自身が不覚な興奮に酔っているからでもあったろう。昨夜、同行の E 君から『報道 PRESS』の腕章を渡されたときにすぐ感じさせられたのだが、果してぼくが冷静な観察者であり得るだろうか、その不安がまず胸の中へよどみになって不消化のままに残ってしまった」（同前）と語る。高橋が、なぜ「冷静な観察者」でいることに不安を覚えているのかは、同記述からでは十全に読み取れないが、「ともかく見たままをメモして、メモしたままを書くほかはない。そんなふうに自分に何度も言いきかせては床の中でねむれない眼をむりにあわせていた」（同前）と、砂川の「現場」を訪れる前の緊張を明かしている。これが、その後 20 年以

上も続くことになる砂川との出会いであった。高橋は、これから訪れる「現場」におののきつつも、なにかを期待していた。

それから、10 ページにおよぶ高橋のルポが記述していくのは、衝突現場での様子である。なかでもとりわけ高橋の目が注がれたのが、地元・砂川の人々の様子であった。高橋は、砂川の人々の立ち居振る舞いに、「冷静な観察者」であるべきはずの自分とは、正反対とも言える余裕を感じとっていた。「ぼくの方がさっきからすこしあがり気味なのに、この人たちはどこにも暗い影がない。タオルで鉢巻した農夫が赤旗をかついで笑っている。それが少しもこっけいでない。ごく自然なのだ」

(同前: 185)。高橋は、砂川の人々がたたえる「無類の明るさ」(同前)に目を見張った。

時刻が午前 6 時半をすぎたところで、「来た」(同前: 186)「キタヨー」(同前)というかけ声と共にその日(そして高橋にとって)「最初の『衝突』」(同前)が発生した。高橋はそこで地元の側に「消防自動車がデーンとすえられていた」(同前)ことを見つけた。「戦時中のぼくたちの感覚では消防は権力の側のものだという印象を消すことができない。ところがいまは、すくなくともこの砂川では、消防団が団服で、消防自動車をくり出して警官隊と向きあっているのだ。警官隊が行動を起そうとするとサイレンを鳴らして対抗している」(同前)と、砂川で初めて見た光景に興奮した。

高橋にとって、その光景はカルチャー・ショックであった。ショックはつづく。警官隊と地元側の衝突が小康状態となったとき、高橋の期待は、またも現実の光景によって裏切られる。「最前線では警官隊と労組員とが顔つきあわせたままの姿勢で動かない。にらみあいといったら事実と違う。笑いあってはときにひとことふたこと話しあい、タバコの火を分けているのである。早大生が向い側の警官とニコニコ話しているのが見える。これがいまあのもみあいをしたどうしであり、これからあるいは血の雨を降らせるかもしれぬものどうしなのだ」(同前: 187)。

それから測量の終了時刻である午後 4 時までの約半日間、高橋は愛用のカメラを首に下げながら、「現場」を積極的に歩き回り、事態を把握しようと努めた。その高橋が口から漏らしたかもしれな

い心の声が、現場で聞こえる砂川の人々の方言混じりの会話、「座り込みなんぞ駄目だ。こっちから揉んでいくべーや」(同前: 188)などの横で記されている。

「砂川を応援しているのは何といっても労働者の組織の力であろう。しかしこうして同じく大地に鋤をとって働く農民が、意外なほどに各地から、茨城から福島から栃木から一応援に来ているのであった」(同前: 192)。

「この日の砂川へ社会党、労農党からは国会議員団、都会議員団がいれかわりやってきていたし、社会党は街道の北側の一軒の民家を本部として活躍していたが、これらにくらべて共産党の表だった動きは見えなかったようだ」(同前: 193)。

「例によって警察側のスピーカーは威嚇放送をつづけている。ことに地元を刺激しないように『そこに坐りこんでおられる労組のみなさん…』と『労組』『労組』をくりかえす。坐り込んでいるのは地元民と労組員との混然一体であるのに。これは地元側と支援労組とを切り離す一種の分裂策とも考えられよう」(同前)。

そして、高橋の記述に特徴的なのが、いわゆる「地元側」ではない人々の姿を、その表情まで克明に記している点にある。たとえば、警官について、「一人の警官はテレてしきりとあちらこちらを見廻している。一人は下唇を突き出してふてくされている。もう一人は固く不動の姿勢をとっている。こらえているらしい。だが眼元には涙が溜ってくるのがみえている」(同前: 188)と記す。

他にも、当時、高橋と教科書問題をめぐって論争をしていた民主党代議士、並木芳雄について、並木が警官隊との交渉に失敗した場面を、「ついに並木は降りた。顔面は真紅である。民主党の中でも再軍備を論じさせれば仲仲鋭い。しかし一方、『並木の票はお辞儀でとる』といわれるほど、三多摩、特に西多摩の農村を歩き廻り、誰にも腰を低く、面倒もよく見ると評判で、連続当選してきた彼。…その並木芳雄が、いま彼の最も頼みとする地盤で、彼を支持する農村青年の前で、与党なるが故に、民主党なるが故に警官隊の指揮者から小僧のつかいのようにあしらわれたのは心中苦しかったであろう」(同前: 192)と、その内面にまで分け入る記述をした。

ここに、「敵／味方」を問わず記述するという高橋の特徴が現出している。同時代的に残された数ある「記録」でも、「地元」側から見れば「敵」である警官隊や与党の政治家たちの表情について語ったものは、ほとんどない。彼らの姿は、たいていの場合「悪者」として描かれた。たとえば、当時、砂川闘争の現場を取材した新聞記者たちによるルポルタージュには、同日の警官隊の様子について、「警官は黙々と“作業”を続けて行く。座込隊はともかなわない。みると女の乳房に手を入れたり、太ももに乗って感触を楽しんでいるのがある。警官にあり勝ちなサディズムだ」(伊藤他 1957: 112)と、記述した。高橋も、警官たちの非道な行いについてルポで記している。しかし、その姿よりも、涙をこらえている一人の若い警官の姿が、高橋の心に深く留まっていた。このことが示す意味については、後ほど改めて検討する。

さて、この日の取材は、「闘争本部」が置かれた阿豆佐味天神に集まった人々による「共闘万歳」

(高橋 1955: 194) の声をもって終わった。立川へと戻る自動車のなかで、高橋は外から聞こえる労働者の歌声を耳にしながら、一日を振り返って、以下のような自問自答を行なったようである。「明日の砂川はどのようになるか、それは私にはわからない。いや今日一日の砂川をどれだけ忠実に伝えることができるだろうか、自動車の中でそれをくりかえし考えさせられた。そしてまた、一方では歴史家として、歴史教育家としてお前は砂川の問題にどうこたえるかという新しい声もきこえてきた」(同前)。

以上が、高橋の「砂川経験」の第一歩目であった。ルポの記述から、高橋の視線が一貫して地元の人々に向けられていたことが分かる。同時に、「衝突現場」にいる警官隊の「表情」も印象深いものであった。そして以後、高橋は、帰りの車中で「きこえてきた」問いを繰り返し自分に向けて問うこととなる。「歴史教育家としてお前は砂川の問題にどうこたえるのか」。はじめて訪れた砂川の「現場」で、高橋は自らをそこから引き離すことは出来ない「問題」を持ち帰ることとなった。しかし、同ルポでは、それがいかなる「問題」であったのかは十分明記されていない。以下では、高橋が汲み取った「砂川の問題」とはいかなるものであ

ったのか。そして、歴史家／歴史教育家として、その「問題」にどのように答えようと試みたのかを高橋の発言から検証していく。

2. 砂川を語る(1955年9月25日、歴史教育者協議会第七回大会)

頭を揺さぶられるような砂川との出会いから12日後の、1955年9月25日。高橋は「歴史教育の内容と方法」をテーマに鎌倉(横浜国立大学)で開かれた「歴史教育者協議会第七回大会」の総括の挨拶で、はやくも砂川での経験に言及している。その内容は、『世界』に発表されたルポの要約といって良いが、高橋はここでその経験をすでに「問題」として提出していることに注意を払おう。その意味で、高橋が以下の言葉で報告を始めていることは重要である。「私はここで、私がごく最近、この眼と耳で直接学んだ現代史のある場面をとりあげてことをゆるしていただきたいと思います」(高橋 1956a: 291)。

この短い導入の言葉からも、高橋にとって砂川闘争という出来事が「現代史のある場面」として捉えられていたことが分かる。それでは、高橋にとって「現代史」とは、いかなる意味を持つ概念であり、方法なのか。同挨拶からも、高橋の「現代史」観が読み取れる。以下で、検証していこう。

高橋は砂川での経験に触れる前に、前年度大会の総括を行っている。前年に提起された問題として、福島県の只見川ダムの反対運動を「頑張っている」(同前: 288) 老人たちが、「自分たちはこの長い生涯に、何度も何度も政府の『お国の為に』という甘い言葉でだまされてきた。そしていつもあとで裏切られた。もうだまされないぞ」(同前: 289) という理由で反対していることを挙げ、「実に七十年、八十年の自分の生きてきた歴史に照らして『もうだまされないぞ』という確信になっているのですね」(同前) と、説明する。そして、「しかし、わたしたちのかわいい子どもたちが七十、八十の老人になってから『ああ、日本は植民地だ』と気づいてももうおそい。それを、いま、はっきりと気づかせるのが歴史教育の仕事である。そのためにこそ私たち、歴史教育にたずさわる歴史教師、社会科の教師、いやすべての教育者が歴史を学習することの重大な意義、それを大会の総括としてとりあ

げたつもりであります」(同前)と、振り返る。目前で起きている問題をいかに理解するのか。その理解ために歴史を学習する意義があるというのが、高橋の持論であった。

けれども、高橋は、「それから一年間、私たちの歴史教育の活動を通じ、また、この大会の討論を若干うかがってしまして、私は新しい問題にぶつかった思いがいたすのです」(同前)と、新たに論を展開するのであった。前年度「歴史を、といったときに、何かできあいの歴史のようなものが頭に浮かんでしまったのではないだろうか。もしそうだとしたら歴史に対するたいへんな思いあがりではなからうか」(同前)と、前年の発言を反省したうえで、「歴史はもっと複雑に、しかも自分の地肌にまわりついてくるものでなければならぬのではないか」(同前: 290)と、聴衆に新しく問題提起を行なったのである。高橋は、このあとも、「歴史をできあいのもの、あるいは与えられたものとして受けとめるのではなく、自分の地肌でその複雑さをうけとめるという問題なのです」(同前)と繰り返し、「現代史の複雑さ」を十分理解したうえで、その複雑さについて思考するよう会場に促した。

そこから具体例として語り出されたのが、自身が「眼と耳で直接学んだ」砂川闘争の経験であった。それでは、高橋はここで砂川で目撃したこととして次のような場面を挙げる。高橋が「いまも私の眼に残っております」(同前: 291)「その日の一コマ、二コマ」(同前)として語ったのが、警官隊に「胸をうたれてしばらく道に倒れていたおばあさんの姿」(同前)や「街の消防自動車がデーンと道路の中にすえられて抵抗している」(同前: 292)姿、そして「実にみじめなもの」(同前: 293)であった「並木さんの顔色」(同前)、それから「不動の姿勢をとって」(同前)涙をこらえていた「若い警官」(同前)の姿であった。高橋は、砂川の「現場」で直面したこれらの人々の姿に「現代史の複雑さ」を感じ取っていたと言える。それは、高橋が「自分の地肌で」受け止めた複雑さであった。つまり、若い警官の眼に「たまってやがてはらっと両の頬を落ちて」(同前)いった涙は、現代史／「砂川の問題」の複雑さを象徴するものとして、高橋によって語られた。その涙／問題に、歴史家／歴史教育家である高橋はどう答えるのか。それが、高橋に

とっての「砂川問題」の出発点であった。

高橋はさらに、なぜその涙／問題に答える必要があるのかをこの次で明かしている。結論から先に述べれば、それは「現代史」を思考する際に必要である「歴史意識」(同前: 294)を磨くためであった。高橋は、「歴史は民衆の歴史であるとか、民衆のものであるとか、わたくしたちは口では申します。しかしその意味をほんとうに具体的に、人間のぬくもりのあるものとしてはっきりさせていきたいと思います」(同前: 293-294)と、既存の「歴史」への問い直しを呼びかける。

「高天原的な歴史を打ち破ってさて科学的な歴史をと、進んできた私たちの場合にもその科学的な歴史を民衆の生活のぬくもりの中でとらえる感覚、それこそ歴史意識というものを、十分に、親も、教師も、いや歴史学者も自分のものにしているとはいきれないのではないかと案じられるからであります」(同前: 294)と述べるように、高橋が「若い警官の涙」にこだわる根底には、戦後10年を歩んできた「戦後歴史学」への真摯な問いかけがあった。別の言い方をすれば、私たち歴史家／歴史教育家は、「警官の涙」の問題をきちんと考えてきたのか。その「複雑さ」を抜きにして、現代の問題について解決することが出来るのかと、高橋はここで問いかけているのである。

それゆえ、高橋が「現代史をとりあげましたのも歴史を自分の皮膚にふれるところに引き寄せて考えるというところに意味があったのではなからうかと思うのです」(同前)と述べていることは重要である。その「歴史を自分の皮膚にふれるところに引き寄せて考える」という歴史意識への転換の呼びかけは1960年代以降に本格的潮流となる「民衆史研究」あるいは「民衆精神史研究」と呼ばれた歴史学の「問題意識」を先取りするものであった。

たとえば、「民衆史研究」を代表する一人、鹿野政直は、「民衆を原動力と見る戦後歴史学の史観は、行き着く先として、闘争をたどることが自己目的化される可能性を内包していた。それらは、歴史の先端部分への価値づけの集中をおのずからもたらした。それとともに、本来その火種であった日常の悩みが、置き去りにされがちとなった。そうした硬直性を打ち破り、存在自体が発する問題を

聴きとるところから、歴史学を構成しなおさなければと思うようになった」(鹿野 2005: 8) と、自身の歴史認識の 1960 年代の「転回」について語っている、鹿野の言葉を高橋に引きつけて理解すれば、高橋は「警官の涙」という「存在自体が発する問題を聴きとるところ」に「現代史」という方法の基盤を築こうとしたのである。

高橋が、「砂川問題」に接し、上記の呼びかけを行なったのは 1955 年のことである。それは、網野善彦の整理によれば、「戦後第一期の歴史学」から「戦後第二期の歴史学」へと移行する只中であった(網野 1996: 170)。そのとき、高橋がのちの「民衆史研究」とも深く共鳴する歴史意識へと転換を迫っていることはきわめて重要だ。しかもその呼びかけは、自身が砂川闘争という運動の「現場」で「眼と耳で直接学んだ」経験に発するところにあった。

脇道に入ってしまったが、高橋が唱える「現代史」の特徴をもう一度整理しよう。それは、第一に、複雑さにおいて捉えるという思考性である。そして第二に、警官というような抵抗する側から見れば敵対する者であっても「民衆」の中に含み入れるという開放性である。それは「鉄カブトをかぶって棍棒をふるっている」(高橋 1956a: 293) 人々にとって、砂川闘争とはいかなる経験であったのかを思考／想像する回路を切り開くものとなるだろう。繰り返しになるが、それはいずれもが「戦後歴史学の史観」を、ともすれば「民衆史研究」でさえも、その視野の広さにおいて突破しうるものであった。その意味で、高橋は「民衆史研究」の先駆者として位置づけることも可能のように思える。では、なぜ高橋はそのような視点を持つことが出来たのか。同挨拶の中で述べられた次の言葉が、高橋の思考の基底にあるものの存在を照らし出している。

高橋は、「歴史をつくっている民衆といっても、さらにもっとつっこんで、歴史をつくっている民衆の中でも自分は教師なのだ」という教師の問題としての討論がいったい十分であったかどうかという問題に行き当たるのではないかと思います」(同前: 295) と、大会全体を総括して、会場からの拍手を受けた。すなわち、「自分は教師なのだ」という立場から「現代史」の問題に対峙せざるを得な

い。そのとき、教師たちは誰かの苦しみ(たとえば「若い警官の涙」)を置き去りにしたまま「問題は解決された」と述べることは出来ないだろう。それでは「問題」は解決していないのである。だからこそ、高橋は「現場」で様々な人々の「表情」に眼をやり、「問題」がどこにあるかに気を配った。それは、「歴史教育家」として鍛えられた眼差しであった。

高橋は、差し当たって、砂川の問題を含む自分たちの課題について、歴史の中で問題を捉えていくという「現代史」の方法をもって解決していくという道筋を同挨拶で示した。そして、高橋は、更なる現代史／砂川問題の複雑さに遭遇していく。その「現場」となったのが、砂川中学校の教師たちとの交流の場であった。砂川中学校の教室には、拡張によって家や土地を取られる「反対派」の子どももいれば、「条件派」へと移った家の子もあり、また警察寮が近くにあった関係から警官の子もいたのである。それぞれが闘争の進展の中で「傷」を抱えている状況で、教師はなにが出来るのか。その「問題」と「現場」に高橋は身を投じていくのである。以下では、高橋が砂川中学校の教師たちとの交流で、どのような「問題」に接し、またその「問題」に対して、高橋はいかなる「解決案」を述べたのか検証していく。

3. 砂川の教師と悩む(1955 年 10 月 31 日、座談会「基地砂川の教育」)

高橋がふたたび砂川を訪れたのは、歴史教育者協議会第七回大会から 1 ヶ月後の 1955 年 10 月 31 日であった。歴史教育者協議会と郷土教育全国連絡協議会が共催した「座談会」の司会を高橋が務めたことによる。その様子が、編集委員の一人、鈴木亮の筆によって記述され、『歴史・地理教育 No.14 1955 年 12 月号』に収載されている。

座談会のタイトルは、「基地砂川の教育」。出席者は高橋の他、砂川中学校から 4 名、近隣の国分寺と小金井の小学校から各 1 名、そして「ちょうど砂川基地について視察に来たという」(『歴史・地理教育』編集部 1955: 36) 長野県上田小学校の先生 1 名の計 8 名の教師たちによる座談会であった。

同記事によれば、「編集部では、10 月 31 日、地元砂川の緊迫した空気の中で、どうすれば、子供

に正しい教育をすることができるだろうかと日夜心をくだかれている砂川中学の先生方に集っていただいて、座談会を開いた」（同前: 35）と、その経緯が語られている。

高橋は、同誌の前号にも、「写真ルポ あの日、の砂川町」という記事を寄稿している。そのため、高橋の方から座談会の開催に向けて積極的な働きかけがあったことも推測できる。高橋は、同座談会において、基本的には司会として砂川中学校の教師から現状について聞き取ることに徹している。しかし、随所において鋭い発言を行ない、より問題を深く考えるように促している。それでは、現地の教師たちと膝を突き合わせて意見交換をする中で、高橋はどのような「問題」に接し、そこからなにを考えたのか。以下で、記述を追いつつ考察していく。

座談会が開かれたのは、拡張予定地からほど近い砂川四番にある阿豆佐味天神社務所であった。そこは地元「反対同盟」の本部としても利用されていたため、「壁には全国各地から寄せられた激文や署名が張って」（同前: 36）あった。高橋たち一行は、座談会に臨む前、「反対同盟」の企画部長を務めていた平井武兵衛の案内で拡張予定地の現状を視察した。それから、社務所にてこれまでの経緯について平井からレクチャーされたようである。

会の冒頭で、高橋は「砂川町の問題は、砂川町だけの問題ではなく、九月の歴史教育者協議会の大会でも、砂川の問題が何度かできました。全国の人が考えている。子供に質問された時、どう答えればよいか。そしてこれこそが現代史の問題で、これをさけては通れない。そこで今日の座談会になったわけです」（同前）と、会の開催意義を確認している。ここですでに高橋が「現代史の問題」、あるいは「砂川町の問題は、砂川町だけの問題ではなく」と述べているように、同会において最も頻出した言葉が、この「問題」という言葉であった。

高橋は続けて、「現地で苦労されている先生に、子供を中心に、現地での苦労、それから職場の問題、さらにPTAとの問題などを話していただいて」（同前）と、会の方向性を定めている。地元・砂川中学校の教師たちが現在抱えている「問題」をみんなで解決するため、そのための知恵を出し合お

うというのが同会の目的であった。それゆえ、同会はきわめてプラティカルな「座談会」であった。

ここで、砂川中学校がどのような場所に位置していたのかを確認しておこう。砂川中学校は、拡張予定地である砂川五番に位置し、町で唯一の中学校であった。校舎は滑走路から200メートルの距離にあり、日々、騒音をはじめとする基地公害に生徒・教師共に悩まされていた。つまり、「拡張問題」が起こる以前から、隣接する基地による「基地問題」に悩んでいたというのが、前提としてあった。

闘争が始まってまもなく、拡張に絶対反対の「反対派」と条件次第では移転を考えるという「条件派」が生まれた。その対立は地元「反対同盟」の中で激化したが、教室内の人間関係にも飛び火し、子ども同士が対立することも起きた。また、警察寮が近くにあったことから、「衝突」以降、警官の子どもが肩身の狭い思いをするという状況も生まれていた。それゆえ喫緊の課題として、教師たちは、第一に、この「子どもの対立」の問題にどう対処すれば良いのかと悩んでいたのである。

第二に、上記のような立地条件から米軍機の騒音のため授業が中断されることも頻繁であった砂川中学校の教師たちは、闘争開始と共に積極的に反対運動へと関わるものも現われたが、教師全体としては決して一枚岩とはいえず、とりわけ「中立」を訴える校長とのあいだには意見の衝突が起きていた。この職場をめぐる問題が第二として存在していた。他にも、PTAとの関係、さらには子どもに砂川闘争をどのように教えれば良いのかという「問題」も存在し、とりわけ後者は、同会に出席した教師たち全員の悩みであった。

しかし、砂川中学校の教師たちも、ただ手をこまねいているだけではなかった。同会に出席した教師たちによる「実践」が、高橋の冒頭の挨拶に続いて紹介されている。教師が抱えていた様々な「問題」は、その「実践」の中から発見されたと言っても過言ではなかった。

砂川中学校社会科教諭の鳥辺昭が、その実践について述べている。「ちょうど北多摩で教研大会もあって砂川中学では、砂川問題を調べたんです。第一に、拡張の実態。第二に、拡張問題が子供に与えた影響。第三に、この中で子供が何を考えてい

るかを作文やアンケートで調査しました」(同前)。

1955 年 5 月に拡張計画が砂川町に通告されてから日を置かずして、砂川中学校の教師たちは動き始めた。少なくとも、1955 年 6 月 18 日に阿豆佐味天神社で開かれた初の「立川基地拡張反対町民総蹶起大会」において、「教師団」の「決意表明」は読み上げられたのである。しかし、このときすでに「教師団」は消滅していた。その細かい事情についても同会では述べられているが、ここでは割愛する。この「教師団」に代わって砂川中学校の教師 10 名が集まり結成されたのが、「基地と教育研究サークル」であった。座談会に出席した砂川中学校 4 名の教師は、いずれもこのメンバーであった。本稿では、同サークルの具体的な活動については立ち入らない。ただし、鳥辺がここで述べている「作文」の実践については多少の考察を加えたいと思う。なぜなら、同作文は、砂川中学校の教師たちがどのような「問題」をその内面において抱えていたのかが窺える史料であり、同座談会にどのような葛藤を抱えて砂川の教師たちは臨んでいたのかが分かるからである。

記事にも、座談会の記録と共に「砂川中学一年生の作文より」という形で、その生徒たちが記した計 5 編の作文が収載されている。この作文を含む砂川中学校全学年の生徒（全校生徒ではない）による作文が、座談会から約 1 週間後の 11 月 5 日に、文集「スナガワ」第一集として発行された。この編集と発行を行なったのが、「基地と教育研究サークル」であった。

編集作業の中心を担った国語科教諭の柳沢学が、経緯について文集「スナガワ」第二集に収載された「生徒の作文を読んで」という文章の中で記している。(ちなみに、この文章は 1955 年 9 月 15 日に書かれたものである)。「私は自分の受持っている三年生二クラス、二年生三クラス、計約二百五十名の生徒に対し、九月の始め、各一時間ずつ使って書かせてみた。夏休み中には、周知のように、あの強制立入調査と阻止の大きな事件があった。また条件派の人たちの運動があった」(教職員組合砂川中分会「基地と教育」研究サークル(編) 1956: 31)。

この記述から判断するに、文集「スナガワ」第一集、そして同記事にも、中学 1 年生の作文が多数

載っているため、柳沢以外の教師も、授業中やホームルーム等の時間を使って、生徒に作文を書かせたのであろう。柳沢は、その目的について、第三集の「あとがき」で次のように記している。「私たちがこれを作った目的は、私たちの取り組んでいた研究テーマ“基地と教育”の資料とするためでありましたが、それと同時に、子どもたちの小さな、しかし純なあたまに映じた基地問題の姿と、切ない願いとを、少しでも多くのかたがたに訴えることにより、“日本の悲しみ”であるこの問題の根本的解決に力を合わせていただきたいという基地の教師としての、ささやかな願いがこめられていました」(教職員組合砂川中分会「基地と教育」研究サークル(編) 1957: 42)。

前半部分で明かされているように、文集は当初、サークルの資料として作られた。実際、文集「スナガワ」第一集は、ガリ版刷で発行されたものと、「浜崎印刷株式会社」によって印刷されたものと、内容はほとんど同じながら、2 つのバージョンが存在している。ここで注目したいのが、柳沢が「基地の教師としての、ささやかな願いがこめられていました」と述べる部分である。砂川中学校の教師たちは、当時いかなる思いで「基地問題」と接していたのか。座談会に臨み、文集の作成にいたった教師たちの状況について確認しておこう。

柳沢は当時の心境を、のちに「強制測量が始まると、反対同盟の子供たちも学校を休んで、畑に出て親と一緒にやって応援をしていました。その姿を教室の窓から見て、その向こうに基地が見えて、何もできない教師であることを恥ずかしく思い、涙が出ました」(星 2005: 34)と、明かしている。また、同座談会に出席した数学科教諭の田沢淑も、後年「最初、条件派に走った人達九名の名前は、四番組の掲示板に貼り出された時、わたしはとてもショックでした。わたしの受持ちの子ども親御さんの名前があるのです。こんな時の教師の立場って、とても微妙でした」(竹内 1987: 159)と、回想している。記録によれば、その日「ハリツケにされた」(伊藤他 1957: 56)のは 12 名であったようだが、いずれにしても、その日は 1955 年 6 月 27 日と、闘争開始から約 1 ヶ月半しか経過していない時期であり、田沢は闘争初期の段階から教師としての無力感を覚えていたことは間違いない。

そのような葛藤の末、同サークルメンバーによって編まれたのが文集「スナガワ」であった。

しかし、「基地の教師」たる砂川中学校の教師たちも、ただ「教室の窓から」衝突現場を眺めていたわけではなかったようである。田沢の証言によれば、初めて警察予備隊が出動し、地元側に負傷者が出た 1955 年 8 月 24 日、「その時『こっちへ来い！集まれ！』『腕を組んで！』と叫ぶ人がいるんですよ。同僚の中山正先生なんです。陸士出身の異色の教師で、この方の陣頭指揮のもとに、みんな腕を組んで警官隊に抵抗したのです。もちろん、砂川中学校教師団も参加しました。みんなでスクラムを組んでいる時に、石橋先生なんかは、ワイシャツはビリビリにさかれ、警棒で鼻をなぐられたらしくって、そのワイシャツが血だらけになっていました。…丁度、夏休み中で、子ども達は高い樺の木に登って、無抵抗の先生達が警官になぐられるのを見ているのですよ」（竹内 1987: 159-160）と語る。

この「集まれ！」と叫んだ中山は、敗戦を「関東軍総司令部参謀部付暗号係」（中山 1967: 36）として朝鮮・満州国境で迎えたのち、シベリア抑留を経て、1948 年 5 月 6 日の「誕生日に舞鶴に上陸した」（同前）という経歴を持つ数学教師であった。その経歴から、採用面接の席にて、「軍国主義教育は行わないように。又腰かけのつもりでなく、永く砂川地区教育の向上のために大いに努力して欲しい」（同前）と言われ、「私もそのつもりです」（同前）と誓い、ようやく採用されたとのエピソードを砂川中学校の後身にあたる立川第四中学校の『創立二十周年記念誌』に寄せた文章で語っている。（なお、高橋も 1942 年から 1945 年まで従軍した）。その中山も、ワイシャツが血だらけになった石橋も、同サークルのメンバーであった（石橋は同座談会にも参加した）。

田沢は、他にも「あの時代だから出来たのかも知れませんが、半鐘が鳴ると『それ！なったぞ』って、職員室の時間割をみて『二時間空いているぞ』『たのむねッ』って現場に駆けつけたものです。時間になると『次 授業あっからね』って次の人と交替するのですよ」（竹内 1987: 161）と、当時の「活動」ぶりを明かす。そして、1955 年秋に大島で開催された「第五次教育研究東京集会」の報告

書『東京の教育』にも、「教師たちは子どもの教育環境と、平和のために、スクラムを組んで基地拡張反対闘争には参加していた」（東京都教職員組合 1956: 32）と、記述されている。この「スクラムを組んで」というのは、決して比喻表現ではなく、砂川の教師たちは、測量阻止の「現場」で実際に警官隊と揉み合っていたことが上記の証言からも明らかである。その状況を考えたとき、文集「スナガワ」の発行というのは、「基地の教師」によるサークル／研究活動や「実践」というところから一歩踏み込んだ「抵抗」として捉えるべきであろう。同会に出席した田沢や石橋をはじめとする「基地と教育研究サークル」のメンバーは、時にスクラムにも入りつつ、それでも「教師」として出来ることを模索していた。その成果の一つが、文集「スナガワ」であり、高橋たちとの座談会はその過程の中で行なわれたものであった。

それでは、生徒たちが記した作文から投げかけられた問いや思いをもとに、砂川中学校の教師たちはいかなる問題を汲み取ったのか。鳥辺は、作文を読んだ結果から、「ここから私たちグループは、三つの問題点を考えました」（『歴史・地理教育』編集部 1955: 37）と述べる。「第一に、反対派・条件派の子供たちを仲良くさせるには、どうするか。第二に、静かな町にしたいという願いにどうこたえるか。第三に、子供の批判をどう深めさせればよいか。この三つです」（同前）と、突きつけられた課題を挙げた。同会の議論も、この 3 つに沿って進められていく。

先に議論全体を示せば、以下、「子供たちを仲良くさせるには」、「どう教えどう扱っていくか」、「教師自身の問題」という 3 つの小見出しの下で展開された。その全てを拾うことは出来ないが、高橋がとくに関心を寄せたのが、最後の「教師自身の問題」についてであった。同会でも、最も活発に意見が交わされたその議論の中心に置かれたのが、先述した結成即日で崩壊した「教師団」の問題についてである。高橋は「現地にはいろいろな条件がある。にも拘らず仲間作りをやらねばならぬ。このにも拘らずが問題なのですが」（同前: 44）と断ったうえで、サークルメンバーと対立する校長について、「さきほどどなたが発言されたように、

校長は権力機構の末端であると言いつつ、校長もまた変わり得るものだということでないで職場は前進しないのじゃないか（同前）と、教師たちに問いかけた。

つづいて、例として高橋が語ったのが、9月13日の「衝突現場」で見た警官の表情であった。ここではあの「ポロポロ涙をこぼしている」（同前）警官の姿に加えて、先述のルポには記されなかった別の警官の姿が語られている。「九月十三日の昼食の時の警官の表情。何ともいえない表情でした。この神社の境内で、労組の人たちと向い合って弁当を食べていたのですが、この世の中でこんな悲惨な人があるかしらと思うような表情をして、ぼそぼそと砂をかむような表情で弁当を食べていた」（同前）と、その姿を紹介し、「あの警官を敵だといってしまうと、砂川問題がかたずくのかどうか」（同前）と、教師たちに問うた。

この発言は、ある意味で、「教師団」を結成し、現在はサークル活動に力を入れている砂川中学校の教師たちに冷水を浴びせるような発言である。

「あの警官を敵だといってしまうと、砂川問題がかたずくのかどうか」というのは原則論とも言えるし、あまりにも綺麗事ではないかと、「現場」から反発を受ける可能性を孕む発言である。しかし、高橋は、その直前でも「何かうかがっていると、こうやれば、この線で一緒にやれるという予定されたものをはじめからやってもらえるように感じるのです。これではやはり反感があるのではないのでしょうか」（同前: 43）と、砂川中学校の教師たちの活動方針に苦言を呈していた。それに対して、砂川中学校の社会科教諭、長坂実からは、「個々のところで協力することがみなを高めて行くことになるということはいいいのですが、その場合、ハッキリ対立した時、攻撃し合うことも必要でしょう」（同前: 44）との反論を受けた。その長沢の発言に対し、高橋は「そうですが、攻撃という言葉は批判という言葉にかえてみたらどうでしょう。批判とは、病を癒して人を救うことだといわれます。相手を殺すことは批判ではない」（同前）と、応じる。そして、「校長さんにせよ、誰にせよ、その悩みは、私たちの悩みでもあるのだし、校長のもっている危なさはおくたちの危なさに通じている点もあるのではないだろうか」（同前）と、議

論を結んだ。

以前のところでも見たように、高橋の「敵」をも他者として切り捨てないという姿勢は彼の哲学と言って良いほど一貫したものである。それが、高橋のいかなる人生経験に根ざすものであるかを明かすことは本稿の範囲を超えているが、高橋にとって、米軍基地の「拡張問題」に端を発し、「教室の問題」、「家庭の問題」、「警官の暴行という問題」、「職場の問題」、「平和の問題」、そして「ぼくたち自身の問題」と同座談会の中だけでも複雑に示された「砂川の問題」は、そのような態度をもってしか解決し得ない問題であると捉えられていたことはこの発言からも窺えるだろう。同会において、はっきり述べているわけではないが、「基地闘争」という巨大な問題の前で、かつ対立が日常であるというギスギスした状況の下で、教師はなにが出来るのか、そして教師は子どもたちの前でいかにあるべきかと悩むことは、戦前の軍国主義教育の時代から戦後の民主化、そして「逆コース」の激流の中で教壇に立ち続けてきた高橋にとって身に覚えがある「問題」だったのではないかと。高橋が同会の最後で、「その悩みは、私たちの悩みでもあるのだし」「危なさはぼくたちの危なさに通じている」と言ったとき、「砂川問題」は、砂川の教師たち彼／彼女たちの「問題」ではなかった。また、その「問題」は自分だけで解決出来るような大きさではないことに高橋は気づいたのではないかと。以降、高橋はこの「問題」の解決に向けて、世論に訴えると共に「仲間」を募っていくのである。高橋は、教師たちが作成した文集「スナガワ」から浮かび上がった「問題」を胸に、全国（ときに海外）に向けて「砂川問題」を訴えかけていく（高橋 1957: 52-54）。

4. 「仲間」を集う（1955年11月から1956年10月まで）

ここで、時間軸を少し遡りながら砂川闘争の推移について記し、高橋の行動がいかなる状況に対応したものであったのかを確認しておきたい。

拡張計画が砂川町に伝えられ、すぐさま全町をあげての闘争体制が組まれたのが1955年5月のことである。それから高橋が初めて砂川を訪れた9月13日の強制測量直後の9月17日に町議会が分

裂。「町ぐるみ」闘争はわずか4ヶ月で崩壊した。その間、拡張予定地内の住民のあいだでも条件派と反対派の対立が激化した。闘争開始直後の6月18日に開かれ、「教師団」の声明が読まれた「町民総蹶起大会」では、地元からの参加者が1,000名をこえ、労働組合員を中心とする支援者は150名程であったが、高橋が「座談会」に参加する1週間前の10月24日に開かれた「総蹶起大会」では地元から200名、支援者が500名という逆転した状態に置かれ、これ以降、地元からの参加者は横ばいとなった。しかし、総評を主軸とする支援者の方にはぐらつきが見えた。それが顕在化したのが、1955年11月の「精密測量」をめぐる警官隊との「衝突」場面である。

11月9日の測量では、各労働組合が動員指令を解除したため、地元民約150名が直接警官隊と対峙する。当時、現地を取材した新聞記者の言葉を借りれば、「独りぼっちの砂川」(伊藤他1957:160)という状況に地元は追い込まれたのである。ただし、地元側もただ状況を静観しているわけではなかった。反対同盟のメンバーたちはそれぞれ手分けして、「人の集まる場所には、必ず顔を出し、『砂川はまだ敗けていません。闘っています』と訴えた」(同前:161)。その地元からの声に応じ、新たに支援の名乗りをあげたのが高橋そして清水幾太郎など「文化人」であった。「文化人グループの訪問は、独りぼっちの砂川を勇気づけた」(同前:172)のである。

1955年12月17日、文化人グループ76名による砂川訪問が実現した。つづいて、翌1956年1月10日にも、文化人67名が訪れた。そして、文化人グループの砂川訪問が行なわれた初日に、「基地問題文化人懇談会」という支援グループの結成が約束され、1956年1月27日に第1回目の会合が開かれた。無論、高橋も同会において中心的な役割を担っていたのである(基地問題文化人懇談会1957:3)。

この「文化人」グループの動きと並行する形で、1956年2月22日、1冊の文集が出版された。平塚らいてうが序文を寄せ、婦人民主クラブや先述の砂川中学校教師による「基地と教育研究サークル」が共同して作成にあたった『麦はふまれても——砂川の母と子らの文集——』には、地元農家の「婦人

や母」、砂川中学校の生徒たちが記した作文などが収載された(全日本婦人団体連合会教育宣伝部1956:4)。同文集の成立過程については別稿に譲るとして、この地元民の声を拾い上げようという「文化人」の試みにいち早く反応を示したのが、高橋と同年生まれの歴史家、家永三郎(1913~2002年)であった。

家永は、1956年10月に発行された日本思想についての通史的試み『日本人の思想の歩み』の中で、基地闘争をたたかう人々に触れて、次のように記述した。「大切な農地を奪われまいとして、基地の農民たちが団結し、蹶起したとき、民主主義思想はもう一片の理論ではなく、国民の血となり、肉となって、人びとを動かしているのです。これもまた、過去には見られなかった思想界の新しい現象ではないかと思われます」(家永1956:166)。

以上が、「基地闘争」について触れた全記述だが、ここに「砂川」という地名は登場していない。しかし、文最後に付けられた「参考書」の中に「たいせつな史料」として4冊があげられ、その1冊が『麦はふまれても——砂川の母と子らの文集——』であったことを見逃すわけにはいかない。家永は、「あまりいろいろあって何を挙げてよいかわかりません。ここには、思い浮かぶままに右の四つだけを挙げておきます」(同前:167)と述べているが、「日本の思想の新しい動き」(同前:164)を表現するものとして、「砂川の文集」が取り上げられていることの重要性は何度も確認する必要があるだろう。

そして、家永が与えた「大切な農地を奪われまいとして、基地の農民たちが団結し、蹶起したとき、民主主義思想はもう一片の理論ではなく、国民の血となり、肉となって、人びとを動かしている」という評価は、歴史家によって同時代的に与えられた砂川闘争に対する評価の、その最初期のものと言える。家永は、砂川の(砂川中学校の生徒を含む)「農民」が書き記した作文に「民主主義思想」を読み取っていた。

話を高橋に戻せば、1956年4月に出版された高橋の著書『歴史教育論』に、先述した9月13日のルポ「九月十三日の砂川」と、9月25日の歴教協での挨拶「歴史教育者協議会第七回大会より」が収載されている。高橋は、砂川の「現場」で見たこ

と、経験したことを言葉に変換しながら、ときに講演や座談会で語ることで、ときにそれを「出版」という形でより多くの人に伝えることで、砂川を「問題化」していった。ここに砂川の問題を「現代史の問題」と提起した「理論化」への試みも加えることは出来るだろう。その個人としての活動に加えて、高橋は「基地問題文化人懇談会」という組織を作っていくことで、より広範な人々をその「問題」へと巻き込んでいった。(なお、高橋のルポ「九月十三日の砂川」は、基地問題文化人懇談会が1957年1月に出版した『心に杭は打たれない』にも収載されている)。それが「歴史教育家としてお前は砂川の問題にどうこたえるか」という自分へ向けた問いへの一つの答えであった。

しかし、「砂川問題」はますます大きな問題として、世論を揺らがすことになる。その「現場」となるのが1956年10月の負傷者1,001名を出した「流血の砂川」と呼ばれた強制測量阻止の「現場」であった。その場において、高橋は新しい「問題」と新しい「人々の表情」、そして新しい「現場」に出会うこととなる。

5. 再び砂川へ（1956年10月1日から15日まで）

1956年10月1日、懇談会に加盟していない者も誘いあわせて「基地問題文化人懇談会」のグループ111名が、『『軍事基地拡張反対』と書いた白い布をボディに巻いた大型観光バスの3台』（高橋1956b: 177）に乗り合わせて砂川を訪れた。その様子については、高橋が雑誌『世界』1956年12月号に寄稿したルポルタージュ「闘いの記録」に記されている。高橋は、バスの中で初めて砂川を訪れた1955年9月13日のことを想起していた。「六番、五番、バスが進むにつれて、私には昨年の記憶がまざまざとよみがえってきた。一昨年前の九月十三日。午前六時半の最初の『衝突』はあの石垣のところであった。…それらはまだ昨日のことうようだ」（同前: 178）。それから一行は、地元行動隊長である青木市五郎の案内で「雨の中をこんどの測量予定地に」（同前）進んだ。そして「文化人」一行は、砂川中学校の講堂で地元の人々と懇談することになる。そこで一つの「問題」が発生する。高橋が記すところに、耳を傾けてみよう。

まもなく、砂川中学の講堂で一同は地元の人々と懇談することになった。だが、はじめのうちは、どうしても「文化人」どうしの懇談会になりがちだった。

…名だたる講演や座談の名手たちのあいさつも堀真琴氏の名議長ぶりも地元の農民とうちとけるまでには時間がかかったが、そのとき、妙法寺の西本という坊さんが立った。

「文化人などというが、基地反対に闘っている農民がほんとうの文化人じゃ！」

この一喝が空気を一度に明るくした。「文化人」という不思議な言葉でよばれることに坐り心地の悪さをがまんしていたのが、一同のいつわらぬ気持ちであったろうし、また、木下順二氏が後に語ったように、闘っている農民こそが文化人であることを知っておればこそ、その中で学び、自分を変えようと来た人々がすくなくなかったはずであった。(同前: 178-179)

ここで高橋が明かす「事件」は、このあとに起こる警官隊との「衝突」と比べれば、小さなエピソードとして片付けられてしまう出来事であるが、高橋がこの場で経験したことは決して小さなものではなかった。なぜなら、高橋はこの場面において、たじろいでいるのである。

もう一度、状況を整理してみよう。高橋を含む「文化人」グループは、「軍事基地拡張反対」と白い布をボディに巻きつけた大型バスを降りたのち、地元の人々と懇親するため、砂川中学校の講堂に集まった。しかし、活字やテレビで知っている著名人たちといきなり話しが進むはずもなく、また堀真琴のように何度も「町民大会」で挨拶をしている人間であっても、直接対面して喋るのは勝手が異なるため、場の雰囲気は盛り上がりせず、「文化人」と地元の間には越えがたい壁が存在していた。

そのとき、この壁を取り払うような発言をしたのが、日本山妙法寺の西本上人であった。西本は1955年7月1日に初めて砂川を訪れて以降、砂川に立てた道場に住み込み、地元民と接してきた人物である。(高橋の同ルポにも、日本山妙法寺のうちわ太鼓を鳴らす様子が活写されている)。そのた

め、「地元」と「文化人」との間を行き来することが可能な立場であった。その西本が、「闘っている農民がほんとうの文化人じゃ！」と一喝したとき、むしろ救われたと思ったのは「文化人」の方であった。

高橋がそのときの心境を木下順二の言葉を借りながら説明しているように、この闘争の中で「学び」、「自分を変えようと来た」という心づもりであったが、いざ闘争の当事者である砂川の人々の前に、その「現場」で立たされたとき、高橋は再び「自分は何者であるか」を問わざるを得なかった。「文化人」という仰々しい肩書きに対して、自分は何に出来るのか。あるいは「文化人」という立場の人間が、この砂川になにををしに来たのかという視線を感じたであろう高橋は、自らの存在をめぐって一瞬たじろぐ。

しかし、西本の言葉が、その気負いや銜いを緩和した。高橋はのちに記した文章のなかで、わざわざ補足のような格好で、『文化人』とか『知識人』とかいういい方がどうのというのは傍観者のいい方であろう。地元の人々はその人々を買いかぶりもしなければ、その果す役割を見落しもししていない（同前: 54）と強調している。それほどのショックを高橋はこの場で受けたのである。

ここで重要なのは、高橋がその場で感じた「坐り心地の悪さ」に目を背けることなく、誠実に向き合おうとしている姿勢である。E・H・カーは、「歴史家を客観的であると呼ぶ時」（E・H・カー 1962: 183）に求められる能力として、「いかに自分がこの状況に巻き込まれているかを認識する能力」（同前）を挙げている。これまで見てきたように、高橋はいつも状況の中で巻き込まれている「自分」を念頭において思考し、行動した。そして、その「たじろぎ」は、決して自閉的な方向へと高橋を進ませるのではなく、逆にその「たじろぎ」によって新しい視野が開かれ、次なる行動へと向かわせるものであった。

このとき高橋が新たに目を向けたのが、懇親会場に「歌いながら入ってくる」（高橋 1956b: 179）全学連の学生たちであった。「中のようすにあわてて歌うのをやめて足をしのばせる」（同前）彼／彼女たちの姿で、砂川中学校の講堂は埋まったのである。そして、その元気に充ちた姿こそ、前年（1955

年）の闘争現場ではほとんど見かけなかった新しい「支援者」の姿であった。高橋は、今回の「現場」で新しく支援の輪に加わり動き出した人々に注視していく。

ルポを読むと、高橋は10月1日のあと、4日から15日（この日に「砂川基地反対勝利への国民総蹶起大会」が開かれた）まで、連日砂川通いをしていたようである。高橋の記述は、前年との比較を交えながら纏められている。高橋が感知した前年との違いは、以下のようなものであった。

第一に、闘争に新しく加わった人々である。10月5日には、「板付基地反対同盟」（同前: 181）の旗を持つ数名と代表の松本治一郎が訪れ、他にも茨城の百里、妙義、新潟、小牧、北富士、神之池など、反基地闘争を闘う他地域の代表が砂川に激励に来た。また同日には、日本共産党の東京都委員会が「大型バス二台をつらね、そろいの腕章で応援にかけつけ」（同前）た。そして、6日には野坂参三が青木市五郎と握手をするなど、「共産党の地味な活動が私たちの眼にもうつるようになってきた」（同前: 182）と、高橋は記す。また、先述の「文化人」（同前: 183）の一部は「連日、泊まりこんで」（同前）いる程、熱心に活動した。全学連の学生については、あとで触れよう。

第二に、高橋が気付いたのが、「地元民」の変化であった。高橋は、「一日に砂川をたずねたとき、私は、地元民の一人一人の言葉にびっくりした。去年は『おれたちは百姓だ。土地を渡せない』そういていた農民たちが、いまは『砂川に原水爆の基地をつくらせない。砂川の農民は平和のために闘っているのだ。砂川の私たちが一尺退けば日本の領土が一尺減る。私たちは砂川の土地を守るだけに闘っているのではない。いずれは立川の基地も返してもらおう。日本中の六百五十ヵ所の軍事基地も、沖縄も返してもらって民族の独立をなしとげるまで闘いは止めない』（同前: 182）と、おそらくは演説等で述べていることに目を見張った。そして、「この変わりかた、これは某日、第四ゲートの付近を訪れた一評論家が言いすてたように、『誰か外部からきて洗脳した』ためだろうか。十数日、砂川の農民たちと話した私には、それがそうした付焼刃なものとはどうしても思えなかった」

(同前)と、地元側をフォローしたのである。当時よく用いられた表現で言えば、「地元民の生長」(基地問題文化人懇談会 1957: 119)に高橋は心動かされていた。

そして、第三に、測量隊の変化であった。高橋は「今年の測量隊はきわめて暴力化している」(高橋 1956b: 181)と言い、前年との空気の違いに言及した。昨年に見られたような若い警官が涙するような雰囲気は、1956年には見られなかったのである。他にも、交番の前に立って「ライカ型カメラを下げている私服」(同前)や「基地の中からこちらへ向けているカメラ」(同前)などに警察側の「挑発的な底意」(同前)を読み取っていた。高橋が、「最初から警官隊の実力行使によって測量しようと計画しているものとは見えなかった」(同前)と述べるように、「現場」には殺伐とした一発触発の緊張感が漂っていた。

その一方で、1956年の「現場」には新しい風も吹いていた。その象徴が、米軍機の離発着の際になびく各大学の「旗」であった。それが第四として挙げられる、大学生の姿である。高橋は、『〇〇大学歴史研究会』の赤旗が立ち、H大やK大の史学科の学生が私を見つけてかけよって来てくれたときはやはりうれしかった」(同前: 184)と、素直な感想を述べている。その学生たちは、「砂川中学校講堂の床に俵にくるまって寝て」(同前: 185)いた。「学連さん」と呼ばれた彼／彼女たちは、地元の小さなヒーローとなっていた。

これらの記述から、測量隊側からの圧力が強まる中で、しかし、それを跳ね返すような全学連の学生や全国基地からの応援団、そして文化人たちの動きがあり、それぞれが地元民と交流しながら、共闘の輪を拡げていたことが分かる。しかし、「流血の砂川」と言われた10月12日・13日の警官隊との「衝突」については、高橋は自分の言葉で記述をしていない。高橋が両日についてルポに記した箇所は全て新聞記事からの引用であった(同前: 185-186)。その理由は定かでないが、高橋がなんらかの事情によってその現場に居合わせなかったという可能性が高い。

高橋自身が見聞きしたことを記した記述は、「流血の砂川」の翌14日朝から再開する。「翌朝、砂川にかけつける私の胸は重かった。だが、これは

どうしたことだろう。砂川についてみると、町のどこにも、想像したような悲壮感の一片もただよってはいないのだ」(同前: 187)と、その驚きを書きとっている。これも「昨年のあの激突のあり、残念ながら応援の労組員の動員はいくらか低下したものだ」(同前)という前年との比較に基づいた驚きであった。

そして、その場で聞きとった一人の労働者の声を書き留めている。「ぼくは四日、五日と泊り込みました。とても愉快でした。しかし現場を離れると砂川はもう駄目なんではないか、というような悲壮感に襲われました。昨日の警官の暴行をきいてぼくは自分が行かなくてはと決心しました。…ぼくはいま行かなかったら自分は人間としてぐらついでしまうのではないかと不安でした。そしてここへ来て勝利を確信することができました。ほんとに来てよかったと思います」(同前)。高橋はこの記述から「労組員の生長」を表したかったのではないか。

その夜、政府は15日以降の測量を一時中止すると発表した。出来事をのちの視点から振り返れば、強制測量阻止のピークは1956年10月12日・13日だったと分かる。しかし、当時の状況としては、測量期限は10月16日までと定められていたため、「流血の砂川」後も続くと考えられていた。実際、10月14日には15日・16日に備えて1万人の動員指令が出されていた。また調達局や警官隊の方も、14日の測量を強行する腹積もりでいたのである(伊藤他 1957: 247)。

高橋は、測量の中止が決まった翌15日朝の空気を次のように記している。「翌早朝、いつものように私はまず阿豆佐味天神の境内に入った。土も草も木もまだしめっていた。学生が10人ほどで体操をはじめた」(高橋 1956b: 188)。そして、勝利を記念する「砂川基地反対闘争勝利への国民総蹶起大会」が開かれる直前の空気について、「10人の学生が15人になり20人になった。二つにわかれて『ワッ』とスクラムの練習をはじめた。50人ほどになって歌になった。労組員も加って100人ほどの輪ができ、それが150人になり、いつか赤旗が中央に立ち、アコーディオンにあわせてフォークダンスになった。全くそれは明るかった」(同前)と、感動を込めて語った。また、高橋自身、歓喜の渦へ

と飛び込んだ経験を記している。「勝利のデモ行進がはじまったとき、篠原正瑛氏も私も、そして基地問題文化人懇談会の事務局の諸君も、眼の前に来た労組のワッショイワッショイの蛇行の中へ飛び込まずにはいられなかった」（同前）。

高橋が、「流血の砂川」直後の「現場」で感じたのは、この人々がもつ明るさに充ちたエネルギーであった。それゆえ、ルポを締めくくる言葉も未来志向的である。

砂川の人々の行動を、古い知識や、論理や法律にてらして叩くことはできるかもしれない。しかし、私たちが十数日を過ごして話しあってきた地元の人々の胸には、新しい論理、新しい思想が生れ、不拔のものになっている事を知らねばならないだろう。

13日をさかいにして、いままで、砂川問題に政府の無策を難じ、また社会党が現地の抵抗をけしかけているのがけしからぬ、というように言っていた新聞の論調が、国民的基盤に立ってアメリカと話合えといい、安保条約や行政協定の改訂を示唆するような傾向を見せはじめたことは注目していい。

思えば今年に入ってから自国の領土内に外国の軍事基地をおかれている諸民族がいつせいに軍事基地撤廃と民族独立の方向にそって勝利しつつある。アイスランド、セイロン、フィリッピン、キプロス、シンガポール、モロッコ、いずれもあるいは米、英の軍事基地撤廃を要求し、あるいはその勢力が選挙に勝利し、あるいはまた軍事基地の土地所有権を取り戻している。

こうした世界の歴史の大勢の中で、わが沖縄と砂川の闘争が、日本国内の全ての米軍基地反対闘争のかなめとなり、烽火となっているのだといえる。

「これから、ほんきになってがんばりましょう」といった砂川の老婆の言葉が日本国民一人残らずの共通の意識になる日は決して遠いことではないだろう。（同前）

ここには、自分たちの力で勝ちとった「勝利」に満足しながらも、さらに「問題」を外へと広げ、未

来への展望を語る高橋の姿が記録されている。この明るさというのは、高橋だけが特別なものではなかった。その「現場」を作った人々が共有した自信の現われであった。マスコミによって「事件」として報道されたのは、あくまで警官隊との「衝突」による負傷者の数であった。しかし、その「現場」を経験した人々が出来事として記録／記憶しているのは、その場に充ちていたエネルギーであり、それが内にたたえる明るさであり、その中でつかの間覚えた解放感であった。それが、高橋が同時代的に経験した「流血の砂川」の実相であった。

それでは、高橋がそれぞれの「現場」で汲み取った「砂川の問題」は、この「勝利」によって解決されたのであろうか。高橋はルポで、次のような地元からの声を紹介している。地元のA氏（おそらくは先述の青木市五郎）は、測量一時中止の発表後に求められたコメントで、「きのう死者が出たというラジオのニュースで心を痛めた。誤報でほっとした。負傷した学生や労働者の方々にはほんとお気の毒に思っています。だが、私たちにとっては警官隊とぶつかってるようなときが一番闘争の楽なときなんです。…一番闘争の苦しいのは衝突もなく、新聞も書かず、誰も来てくれないときだ。内部崩壊が一番こわい。静かな闘いが一番苦しいものだ」（同前:187）と、語った。地元を代表してA氏が語ったこの「予言」は、この日の「勝利」以降、現実のものとなった。闘争の「現場」は、段々と各個人の「内面」へと移行していくのである。それゆえ、一見奇妙にも聞こえる砂川の老婆の「これから、ほんきになってがんばりましょう」というかけ声は、まさにこの後に訪れる「現場」と「問題」のことを示していた。高橋が、それにどれほど自覚的であったかは残念ながらルポからでは判別しない。

6. 砂川を記す（1956年11月、「流血の砂川」直後）

本節では、高橋が幾日にも及ぶ「現場」との関わりの涯てに記した砂川闘争をめぐる同時代的な評価について確認していこう。ここで素材として取り扱うのは、1956年11月に発行された東洋経済新報社『世界史講座』第八巻月報に高橋が寄せた文章「砂川におもう」である。

高橋は「砂川におもう」を三部構成でまとめている。以下では、「砂川」に直接言及した第二部と第三部を中心に考察する。大きく分ければ、第二部では「砂川」で高橋が経験したことが記述され、第三部では編集部から求められたテーマである「砂川闘争の歴史的意義」（高橋 1956c: 4）について論じられているが、高橋は「それはいまのわたしには荷のかった問題である」（同前）とし、「砂川の農民の姿を通して考えさせられ」（同前）たことを記している。

第二部で高橋の「砂川経験」としてもっぱら語られるのが、地元・砂川の人々の「内に蔵した力」

（同前: 3）のことであった。高橋が、砂川の「現場」で最も目をひかれたのが、「砂川のお百姓さんたち」（同前: 2）のとりわけ『おばさん』とよぶのがふさわしい地元婦人たち（同前）の「底ぬけの明るさ」（同前: 3）であった。高橋は「青木さんのユーモアたっぷりの指導もあるが、そこには、爆笑の時間のなんと多かったことか。そして地元の娘さんたちはしばしばフォークダンスを楽しんでいた」（同前）と、「流血の砂川」と呼ばれた強制測量阻止の「現場」について記した。高橋の見立てによれば、その明るさは自信の現れでもあった。

「昨年はいっしょに座り込んだ砂川中学の先生たちに、どんなはげしい闘争のなかでも、ゆくすえ砂川の町をになう子どもたちにはきちんと授業をしてください、と、あの一人の力、片腕の力もほしい闘争のなかで頼むことのできる自信」（同前）と、記す。地元民の「こうした、内に蔵した力」に「現場」で出会った高橋は、それゆえ「基地反対闘争は労働者・学生・市民・文化人等、国民的闘争ではじめて勝ちうるものであることはまちがいない。だが、その闘いの軸になるものはつねに地元民だ、ということ。だから、地元民にしてみれば、支援してもらうのではなくて、あくまでお互いのもち分でいっしょに闘うのである」（同前）と、記すのであった。

それでは、高橋は地元民の明るさ／自信／内に蔵した力の源泉をなにと捉えていたのか。高橋は、次のようなエピソードを明かしている。1955年11月、労働組合の方針転換によって地元民だけで警官隊と「衝突」した後、「警官隊に踏み荒らされて、麦蒔きのシュンを外しそうになった富^{ママ}岡さん

（副行動隊長）の畑へ」（同前: 4）「だれいうとなく多勢して集って共同で麦蒔きを手早く見事にやっつてのけ」（同前）た。だから、「富^{ママ}岡さんはじめ反対同盟の人々の麦はたいへんできが良くて、その麦を食って元気に闘っているのだ、と地元の人々はわたしたちに語った」（同前）。高橋は闘争の「現場」を支えている砂川農民たちの「生活」の強さを感じた。裏返して言えば、基地の拡張計画は、この「現場」を砂川の人々から奪い取ろうとするものであった。そこに「砂川問題」の原点が存在していたのである。

それゆえ、高橋にとって砂川の闘いとは、次のように要約出来るものであった。「要するに、砂川の人々のいまやっていることは、平和をねがってのことだし、独立の闘いであるし、民主主義を具体的に示しているものだと、わたしは思っている。しかし、それは、つねに自分たちの日常生活と闘争を通して、なっとくしきったことを着実にやっている。自分たちのふにおちないことははじきかえしている」（同前）。高橋が1956年10月の闘争で新しく出会った「現場」とは、この農民的生活のことであり、「問題」とは、この何代にも続く営みを破壊するものである「基地拡張」であった。その意味で、高橋はこのとき改めて初発の「問題」と出会い直したとも言える。

そして、第三部では、「砂川の農民の姿を通して考えさせられ」たことが整理される。高橋はそれを5つに纏めているが、ここでは列挙することはせず、論点のみを抽出して考察しよう。高橋が「砂川の農民の姿を通して考えさせられ」たのは、砂川の人々が実践している「生活の底辺から積みあげ、ふに落ちたところから一步一步進んでいくという手堅い道」（同前: 5）のことであった。高橋にとって「それは、最近特にきびしい問題として考え直されようとしている社会主義への移行の具体的な道を考える上に、ここのところからキメをこまかく考えを進めていくことがたいせつなのではないか」（同前）と問うものであったが、ここで考えたいのは「社会主義への移行」云々ということではない。

高橋は、ここで再三にわたって「ふに落ちた」という言葉を用い、その感覚をもって思考しているのかを問うのである。例えば、高橋は「ハンガリー

のこの十年の『民主化』がハンガリー国民のふに落ちたものであったのかどうか」(同前:4)という形で。あるいは、「いわゆる五原則が、言葉や個条としてではなく、みずからの手で民族を解放したものの闘いを通して…」(同前:5)など、腑や手といった身体的感覚が直感することを置き去りにするのではなく、むしろその身体が語りかけてくる声を十分に聴きながら、「問題」に対処するよう促すのである。

高橋は先のハンガリーの「民主化」問題について、「その民主化が方向として正しいものでも国民の生活と闘いから生長せず、そうした土壌であたためられることなく、上からあるいは横から国民の生活におろされてき、あるいは移されてきたとき、危険をはらむものではないか」(同前:4-5)と述べているが、その批判は、1955年9月25日の「歴史教育者協議会第七回大会」において、「歴史はもっと複雑に、しかも自分の地肌にとまわりついてくるものでなければならないのではないか」と、既存の「歴史学」を批判したのと同じ形を見るのである。そして、ここで述べられている「ふに落ちる」という言葉は、同会場で高橋が「現代史」を捉えるのに必要な「歴史を民衆の生活のぬくもりの中でとらえる感覚」とほぼ同じ意味を含意しているだろう。この「感覚」こそ、高橋の思考を貫く一本の筋であり、高橋はその感覚、つまりは「ふに落ちたところから一步一步進んでいくという手堅い道」の重要性を砂川の「問題」と「現場」から「眼と耳で直接学んだ」と考えられる。

しかし、この「学び」は次の問いへと進まざるを得ない。では「歴史家として、歴史教育家としてお前は砂川の問題にどうこたえるのか」。次では、その問いかけに対して高橋が到達した1つの答えを、彼の「歴史記述」から考察したい。高橋は、「流血の砂川」で掴み取った「闘争の勝利」に酔うことなく、その最後まで「砂川の問題」に付き合い続けるのであった。

おわりに代えて——砂川を書き続ける（1956年から1975年まで）

砂川闘争の史料をあさっていると幾度も高橋碩一の名前を目にする。あるいは、高橋の書いたものを辿っていくと幾度も砂川闘争に関する記述を

発見する。高橋の名前が登場するのは、例えば次のようなビラである。1968年3月2日・3日に開催予定の第四回「アジアの平和のための日本大会」。その呼びかけ人の一人が、高橋であった。その中には、堀真琴の名前もある。日程の第一日目は、「東富士米軍基地撤去をめざしたたかう現地農民との交流を含む」(立川市図書館 2013:34)と記載されている。高橋はここでも「文化人」として「歴史教育家」として「現地農民」と交流していたのであろう。あるいは、1973年に結成された「基地対策全国連絡会議」(略称、基地連)の発起人の中に高橋がいた(基地対策全国連絡会議 1983:247)。高橋は、1965年に沖縄も訪れている(そこで瀬長亀次郎とも交流する)。そのときの様子を語った文章の書き出しが、また特徴的である。「一昨年の暮沖縄県をはじめ訪れて、まず胸を刺されたのは次のような話をきいたときであった」(高橋 1967:22)。高橋は、ここでも「たじろぐ」ことから出発している。

そして、1974年に発行された『おはなし日本歴史 22 独立をもとめて』(岩崎書店)の編著者の一人が高橋であった。明記はないものの、砂川闘争を語った章「砂川の夕やけ雲」(和歌森他 1974:79-103)を記したのは高橋において他考えられない。「出来事」から20年経っても、高橋は「砂川闘争」を書き続けた。

時系列は前後するが、1963年、砂川闘争の前年(1954年)に高裁判決をめぐって再燃し、高橋も被告救援のため先頭に立って尽力した(高橋 1958:51-53)松川事件の最終判決を傍聴している時、高橋はふと「砂川闘争を連想した」(高橋 1963:47)。「裁判は東京だよ。やっぱりみんなの眼が光ってるしね。乱暴なことはできない」(同前)という中島健蔵との立ち話に反応しての「連想」であった。

砂川闘争から20年経ち、最後まで裁判闘争を行っていた青木市五郎の基地内にある土地が返還される直前の1975年11月、高橋が新聞(アカハタ)に連載していた「続・流行歌でつづる日本現代史」の最終回「エピローグ」を「流血の砂川」で歌われた「赤とんぼ」で結んだ。そのタイトルは『ラ・マルセイユーズ』と『君が代』とであったにも関わらず、高橋は砂川の「歴史」を最後に記したのである。その部分を引用しよう。

いま静かに思い起こすのは、いまから二十年まえ、1956年の米軍基地拡張反対のいわゆる砂川闘争です。55年の第一次強制測量につづく第二次測量に抵抗した農民、労働者、学生、婦人、僧侶たちの頭上に警官のコン棒が乱打された流血の大事件です。血と泥にまみれたすえ、双方がにらみあった静かなひとときに、どこからだれから歌いだされたのか、静かな、しかし大きな合唱となったのはあの『赤とんぼ』の歌でした。現場にあった中野好夫さんが寄せた一文は、翌十月十四日の『朝日新聞』に言っています。

「二千の鉄カブトとコン棒はたしかに一応目的を達したであろう。だが、これは歴史にのこる恥多き勝利であり、そして堂々の敗北であった」

「堂々の敗北」が『赤とんぼ』によって私たちの胸にふかく刻まれるとすれば、やがて私たちがかちとるであろう「堂々の勝利」に向けての歌を、いまから準備したいと思うのですが…。(高橋 1985: 322)

本稿の最後に、高橋が記したこの「赤とんぼ」の意味について考察したい。高橋は、1955年9月13日に初めて砂川を訪れて以来、拡張問題に留まらない様々な「砂川の問題」に接してきた。そして、「歴史教育家」として、その「問題」にどう関わられるのかを模索してきた。その一連の行動を一言で纏めれば、高橋はつねに「砂川を問題化していく」ことに注力していたと言える。ルポルタージュを記すこともその1つであっただろうし、講演で「砂川の問題」を訴えるのもその1つだろう。そして、「現代史」という概念を持ち込むことで、「砂川問題」を解決可能な次元へと導こうとした。その姿勢がもっとも現れているのが、地元・砂川中学校の教師と行なわれた「座談会」であろう。高橋は、現場の教師たちから「問題」を汲み取るだけでなく、具体的になにが出来るのか、共に悩んだ。しかし、根底にあるのは日米両政府が進める基地拡張計画であり、到底自分たちだけで解決し得るものではなかった。そこで高橋が取った戦略が、「問題」をより多くの人の問題とすることであった。「基地

問題文化人懇談会」での活動や砂川について記した文章の出版、あるいは先ほどの講演なども、全て「問題化」への一歩だったと考えられる。1955年11月以降、社会党と労働組合が砂川から一時撤退し、地元が孤立の中で闘っていたという状況がその背後にはあった。そして、1956年10月の強制測量阻止の場で、高橋は2つの姿を新たに「発見」する。1つが、全学連の学生をはじめとする新たな支援者の広がりであり、もう1つが、地元・砂川の人々の明るさと力強さであった。「支援者」がいくらか力を込めて闘争を支持しても、直接的な当事者である地元が、あるいはその地元の人々の生活が闘争に耐えうるものでなければ、「砂川の／問題」は解決しない。高橋は、警官隊に踏み荒らされた後に誰からとなく共同耕作をし、その麦を食べて元気に闘っている砂川の農家の姿に問題解決への希望を見出していた。「腑に落ちたところから一步一步進んでいくという手堅い道」抜きでは、「問題」は収まらない。そのとき、高橋は「基地問題文化人懇談会」のメンバーと乗り付けた大型バスのボディに巻かれていた「軍事基地拡張絶対反対」という言葉の軽さに悔いていたのではないか。「流血の砂川」という「衝突」現場で高橋が学んだのが、この「現場」は「地元」であるという絶対的な原則であった。しかし、高橋の「学び」は、そこで終わらない。その経験／学びから歴史家／歴史教育家として、「問題」解決のためになにが出来るのかを思考するのである。そして、高橋はなにをしたのか。そして、どのような「問い」を後進である私たちに残したのか。そのことを考えるさいに大きなヒントを与えてくれるのが、同「赤とんぼ」の記述ではないだろうか。

高橋は、一方で、「現場」で見た表情や「腑に落ちる」といった直接的な身体感覚に徹底的にこだわりのながらも、他方、ここでは自分は「現場」にいなかった「経験」を書き記している。別の言い方をすれば、同時代的には見ていない経験／風景を「現代史」の原点に据えているのである。しかも「流血の砂川」を語るときにだけでなく、「砂川闘争」を語るときに定説的な「流血事件」(負傷者の数やその「衝突」に参加した勢力の検知)ではなく、「赤とんぼ」が歌われた場面を砂川闘争の「原風景」として取り出した。その記述はなにを意味している

のか。

高橋が、「血と泥にまみれたすえ、双方がにらみあった静かなひとときに、どこからだれから歌いだされたのか、静かな、しかし大きな合唱となったのはあの『赤とんぼ』の歌でした」と記しているように、その歌は誰のものでもない歌であった。それは、誰もが特権的に所有することが出来ない「時間」であったと言い換えられる。その「時間」は、しかし、裏返して言えば、誰のものにもなりうるという経験／歴史である。高橋は、その「現場」を砂川闘争の「歴史記述」として差し出した。「流血の砂川」の場面で歌われた「赤とんぼ」を私たちは「見る」ことは出来ない。しかし、その歌声を想像して「聴く」ことは出来る。その経験／学びから、では「自分はなにが出来るのか」と高橋に倣って考えたときに、残り僅かではあるが、現在の砂川の歴史学的状況について記し、展望を述べたいと思う。

砂川闘争が始まった 1955 年から 60 年以上が経ついま、出来事の歴史化への動きが一段と加速している。一例を挙げれば、本稿でも名前が出た地元反対同盟の副行動隊長であった宮岡政雄（1913～1982 年）の次女である福島京子を中心に「砂川平和ひろば」が 2010 年に立ち上げられ、現在、氏が残した膨大な史料の整理と資料館の開設が市民を巻き込みながら展開されている（筆者もその末

席にいる）。そのような状況の中で、高橋が「現代史」として「砂川問題」を捉えるように提起したことを受け止めつつ、いかなる砂川闘争の歴史が記述出来るのか。本稿では、その課題を「歴史における表情の問題」として理解したい。つまりは、「現場」にいた人々の表情を含めた「言葉未然のもの」をいかに「歴史記述」に含み込んでいくのかという「問題」である。そこには、当然「警官の涙」といった「する側」の問題も含まれるだろう。より具体的に言えば、本稿でも言及した文集「スナガワ」や高橋が撮った写真、砂川中学校教師たちによるサークル活動、あるいは同校の生徒を含む「地元民」の葛藤や闘いについて、これまでの研究で十分に考察されているとはいいがたい。そのような「砂川闘争」として語られる時には見落とされがちな人々の眼差しを「複雑」に取り込みながら記述する「砂川問題」の現代史の「出版」が必要であると筆者は考える。高橋は、あるところで「現代史は現代との対話ではすまされない。あえていうならば、現代史とはわれわれの現代との格闘である」（高橋 1964: 7）と述べた。その言葉を胸に置きつつ、これらの課題に今後答えていきたい。高橋の「砂川経験」に密着することで見えてきたのは、まだ「聴かれていない」砂川闘争の 1 つの実相ではなからうか。

〔参考文献〕

- 相川陽一（2015）「基地拡張反対運動をめぐる共感の構図——砂川闘争における『激励電報回覧綴』に基づいて——」『歴史評論』778: 40-52
- 明田川融（2000）「1955 年の基地問題——基地問題の序論的考察——」、赤澤史朗・栗谷憲太郎・豊下樽彦・森武磨・吉田裕（編）『「軍事の論理」の史的検証 年報・日本現代史 第六号』現代史料出版: 55-102
- 網野善彦（1996）「戦後歴史学の 50 年 歴史観の問題を中心に」、網野善彦・塚本学・宮田登（編）『列島の文化史 10』日本エディタースクール: 153-179
- 新井浩子（2001）「1950 年代の生活記録・綴方に関する一考察——文集スナガワを中心に——」『早稲田大学教育学会紀要』2: 53-59
- 家永三郎（編）（1956）『日本人の思想の歩み』理論社
- 伊藤牧夫・内田恵造・中島昭（1957）『砂川合戦録』現代社
- E・H・カー（1962）『歴史とは何か』清水幾太郎訳、岩波新書
- 鹿野政直（2005）『近代社会と格闘した思想家たち』岩波ジュニア新書
- 基地対策全国連絡会議（編）（1983）『日本の軍事基地』新日本出版社
- 基地問題文化人懇談会（編）（1957）『心に杭は打たれない』河出書房

- 教職員組合砂川中分会「基地と教育」研究サークル（編）（1956）『文集「スナガワ」第二集』教職員組合砂川中分会「基地と教育」研究サークル
- 教職員組合砂川中分会「基地と教育」研究サークル（編）（1957）『文集 スナガワ 第3号』教職員組合砂川中分会「基地と教育」研究サークル
- 五味文彦・高埜利彦・鳥海靖（編）（1998）『詳説日本史研究』山川出版社
- 佐々木毅・鶴見俊輔・富永健一・中村政則・正村公宏・村上陽一郎（編）（2005）『戦後史大辞典 増補新版』三省堂
- 全日本婦人団体連合会教育宣伝部（編）（1956）『砂川の母と子らの文集 麦はふまれても』全日本婦人団体連合会
- 高橋碩一（1955）「ルポルタージュ 9月13日の砂川」『世界』119: 184-194
- 高橋碩一（1956a）『歴史教育論』河出書房
- 高橋碩一（1956b）「砂川＝私は見た 3 闘いの記録」『世界』132: 177-188
- 高橋碩一（1956c）「砂川におもう」『世界史講座 月報』8: 1-5
- 高橋碩一（1957）「世界史の現段階と民族の責任——原水爆禁止と軍縮のための第三回世界大会に参加して——」『歴史評論』88: 51-54
- 高橋碩一（1958）「最高裁における松川裁判——口頭辯論が開かれるに當って——」『歴史學研究』224:51-53
- 高橋碩一（1963）「歴史の審判に時効はない——松川事件最終判決を傍聴して」『歴史評論』159: 46-49
- 高橋碩一（1964）「現代史の学習はなぜ必要か」『社会科教育』3: 5-14
- 高橋碩一（1967）「解放を妨げているもの」、沖縄・小笠原返還同盟（編）『沖縄黒書』: 22-26
- 高橋碩一（1985）『高橋碩一著作集 第十巻 流行歌でつづる日本現代史』あゆみ出版
- 武居利史（2012）「砂川闘争と美術家たち」『府中市美術館研究紀要』16: 9-25
- 竹内信子（1987）「基地と教育 その1 『砂川で私は、大きく変わりました』」立川・女の暮らし聞き書きの会（編）『つむぐ合本』: 154-165
- 立川市図書館（2013）『砂川事件裁判資料（榎本弁護士資料）29 砂川事件・資料 事件番号なし』立川市図書館
- 東京都教職員組合連合（編）（1956）『東京の教育』博英社
- 豊泉喜一（2014）「砂川基地拡張反対闘争の光と影」立川民俗の会（編）『立川民俗』19: 2-11
- 中山正（1967）「十四年間」立川第四中学校二十周年記念誌編集委員会（編）『立川第四中学校二十周年記念誌』立川第四中学校二十周年記念誌編集委員会: 36-37
- 浜島書店編集部（編）（2006）『詳説日本史』浜島書店
- 星紀一（編）（1996）『写真集 砂川闘争の記録』けやき出版
- 星紀一（編）（2005）『砂川闘争 50年 それぞれの思い』けやき出版
- 宮岡政雄（1970）『砂川闘争の記録』三一書房
- 森脇孝広（2015）「総論 戦後史のなかの砂川闘争——1950年代を中心として——」『歴史評論』778: 5-14
- 『歴史・地理教育』編集部（1955）「座談会 基地砂川の教育 砂川中学の先生を囲んで 司会高橋碩一」14: 35-44
- 和歌森太郎・高橋碩一・来栖良夫・上川淳・徳武敏夫・佐藤伸雄（編著）（1974）『おはなし日本歴史 22 独立を求めて』岩崎書店